

下町ロケット ものづくり・ことづくり

「下町ロケット」が注目されています。主演・助演熱演で視聴率も好調のようです。テーマは、「ものづくり」。新しい価値を作り出す研究開発「の成功」が、夢の具現化に向けた挑戦「の成就」が、主役・脇役、善玉・悪玉の配置によるメリハリ感のあるドラマの中で描かれています。主役は夢を持ち技術を磨きそれを具現化する、脇役はそれを妨害する、というわかり易い建付けによりそのトーンを一層際立たせておりますが、はてさて、現実はどうでしょうか。

あれほど意地悪な脇役はそれほどいないのでは？その代わりに主役はもっとたくさんいるのでは？それ以上にその奥の見えない部分にも小さな主役たちがたくさんいるのでは？ロケットで言えば本体以外にも、例えば発射台や運搬機器など付帯設備、燃料調達やその性状の調整管理、航路・速度・打ち上げ日などの判断システムなどの完成度、等々TVに映るすべてのパートにおいて見えない無数の協力者を含めたそれぞれドラマがあったはずで、飛んでいく役割と飛ぶのをサポートする無数の役割の中で、無数の主役の挑戦とその成就がロケット打ち上げの成功に結実したと見るべきであろうと思います。

本コラム初回のノーベル賞研究者はロケット打ち上げに例えますとシステム系でしょうか、第二回コラムのベンチャーファンドは燃料系（これはわかり易い）、前回コラムの機能性表示食品製造者はずばり部品。偶然ですがきれいに振り分けられました。それぞれがそれぞれの「ものづくり」に挑戦し、成功し、それが重層化・複合化されることで、価値のある「もの」となる以上、それを社会に供給した主役はやはり複数です。

更に加えてその横には、当NPOのように「力を合わせて新しい産業を創造したい」との目的を持つ特定非営利活動法人が、地方行政が、或いはそれを収益源とする会社が存在し、いわゆる概念としての発射台の位置付けを担おうとしています。その拡大型強化版が「産業クラスター」であり、産業基盤そのものという意味では種子島宇宙センターのような役割と言ってもいいのかもしれませんが。こういった発射台的・産業基盤的役割はよく言われる「ものづくり」に対する「ことづくり」なのだとする、その「ことづくり」に対しても挑戦があり、そこにも主役が同じく存在します。

これら無数の「ものづくり」と「ことづくり」への挑戦の成就により初めてロケットは飛んだ。阿部寛と同様に或いはそれ以上に喜んだ人たちがTV画面の外にもたくさんいる。と或る日曜日の夜「下町ロケット」を見ながらパズルのようなそんなことを考えておりました。

(豊田通商 山本)